

本稿作成にあたりましては、東京理科大学伊藤裕久助教授、杉山経子氏および伊藤研究室の皆様にご協力いただきました。

学習院大学史料館常設展

学習院目白キャンパスの建築

会 期：平成 11 年（1999）6 月～

場 所：北 2 号館 1 階 史料館展示室

編集発行：学習院大学史料館

〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1

TEL03-3986-0221（内線 6569）

発行年月：平成 11 年 6 月

学習院大学史料館常設展

学習院目白キャンパスの建築

1999（平成 11）年度～

学習院大学史料館

はじめに

目白校地の正門から入った正面の木立の中に、木造瓦葺の瀟洒な洋館が佇んでいます。これが明治42年(1909)竣工の北別館で、学習院が目白に移転した際図書館として設計・建築されました。同時期に建てられた正堂・寄宿舎等構内の多くの建物が、昭和20年(1945)4月13日の空襲で焼失する中、図書館は当直の教職員の努力で被災を免れました。戦後は昭和38年(1963)まで図書館として使用され、昭和53年(1978)、北2号館(文学部棟)建築のため、曳家・改修されましたが、今も往時の面影を残しています。

平成9年(1997)東京理科大学の伊藤研究室によって実測調査がおこなわれ、同建物の竣工当初の姿を復原することが試みられました。併せて院史資料室所蔵の「学習院土地建物録」等の文献史料をもとに、建築経緯を明らかにすることもできました。

今回の展示では、今も史料館として使用されている北別館を中心に、学習院目白キャンパスの建築について紹介します。

1 学習院キャンパスの変遷と建築—目白キャンパス以前

学習院は明治10年(1877)、華族子弟の学校として神田錦町に開校し、明治17年(1884)官内省所管の官立学校となった。神田錦町校舎はいわゆる「擬洋風建築」の典型であり、中廊下型プランを持つ本館と寄宿舎とで構成されていた。その後、明治21年(1888)には虎ノ門に移転し、御雇外国人建築家ポアンヴィル設計の旧工部大学校を一時利用したが、明治23年(1890)に渡辺讓の設計で本格的な様式建築として四谷校舎が完成した。四谷校舎は、煉瓦造本館を中心とした中庭・ブロック型校舎である。玄関ホール・図書館(1階)および便殿・広間—正堂(2階)を中軸線上に配置し、普通教室・特別教室・休憩所・教員室・事務室・図書館・広間等、ほとんどの機能を本館に集約しており、複数の建築群によって機能的な分散配置をおこなった目白校舎とは対照的になっている。

その後明治27年(1894)の震災によって四谷キャンパスの本館が使用不可能となり、明治29年(1896)に北豊島郡高田村(現在の豊島区目白)に移転が決定した。

2 目白キャンパスの建築経緯

移転の決定から校舎建築が着工するまでには10年間を要した。明治30年(1897)9月には建築計画が官内省により裁定されるが、調査の結果予算超過が判明、中止となった。その後も学習院は数度にわたり計画案を上申するが、許可を得ることができなかった。明治39年(1906)にようやく校舎新築の裁定がおこなわれたが、予算は当初計画の半額程度に抑えられた。それは、この時期官内省の支出が増加し、財政難であったからだと考えられる。当初の計画案は煉瓦造が中心であったが、支出を抑えるために図書館書庫を除くすべての校舎が木造に変更された。工事着工後も、教室や寄宿舎等の新・増設がおこなわれ、明治42年(1909)に全ての校舎建築が完成した。

3 目白キャンパス建築経緯年表

4 建築面積と建築コストの関係

本館・教室ゾーンと寄宿舍ゾーン、両者をつなぐ図書館、さらに官舎ゾーンに明確にゾーニングされた目白キャンパスの建築コストは、限られた総予算の中で、一転豪華主義ではなく各ゾーンにバランスよく配分されている。

また、建坪単価でみると本部・式場および三階建の煉瓦造書庫を持つ図書館が比較的高く、キャンパス全体の中心的存在として質の高い設計がなされたことが理解できる。つづいて教室に重点を置き、寄宿舍はむしろ廉価に抑えながら面積を確保したことが窺われる。

5 主な建築の形式・規模と坪単価

6 目白キャンパスの建築構成

7 設計者久留正道と文部省の学校建築

目白校舎の設計は、久留正道（1855～1914）によるものとされている。久留は、山口半六と共に、文部省の技師として、全国に五校設置された高等中学校の設計を担当し、のちに文部省初代建築課長として多くの学校建築に関わった、明治中後期の文部省学校建築のスタイルを確立した中心的建築家である。

目白キャンパスも機能的な分棟（並列）型の配置、教室ゾーンと寄宿舍ゾーンの明確な分離とそれを繋ぐ図書館の配置、抑制されたデザインを用いる等文部省のスタイルを継承している。

8 史料館の復元的考察

図書館は木造平屋建で、裏側に煉瓦造3階建の書庫も配置されていた。屋根は棧瓦

葺で、中央にトップライト（天窓）を設けている。概観上は縦長の窓が1mおきにあり、その窓枠を兼ねて左右に半角幅の付け柱が配されている。外壁の付け柱は、一件通し柱のようであり、壁全体を真壁のようにデザインしていることが特徴である。ハーフティンバー様式（柱や梁等の骨組みをそのまま外部に現した様式）とも異なる直線ラインを強調した外観は、明治の学校建築の中でも極めて稀なものである。

現状の平面構成は、東側が小部屋に分かれていて、廊下を経て南側に通用口がある。そして昭和53年（1978）の改修の際、当初あった北側の棟が取り壊されている。実測調査で当初の天井・下り壁・書庫への出入口・窓枠等を新たに確認しながら、それをもとに復原平面図を作成した。当初の平面構成は、中央棟は閲覧室・カウンター等一室で構成されていて、南側に通路はなく、大部屋になっていたと考えられる。

9 北別館復原平面図